



立入が丘小学校だより



No. 3

雷の特性を知り、落雷から身を守ろう

6月に入り、もうすぐ梅雨の季節がやってきます。夏場に多い雷は、ちょうどこの時期から増え始めます。1年間に一番雷の多い月は8月で、次いで多いのが9月、その次が7月、そして6月となっています。6月から9月が1年の中で雷が多い期間とすることができ、6月の落雷日数は、5月の2倍以上になります。ちなみに滋賀県の1年間の落雷日数はどれくらいかというと、30年間の平均値で滋賀県（観測地点：彦根）は18.1日、全国24番目の多さです。

落雷による事故は重大な被害を及ぼします。私は子どもの頃、世の中の怖いものの順番として「地震、雷、火事、おやじ」と、雷は地震の次に恐ろしいものとして聞かされてきました（おやじが4番目に来るところに時代を感じますが）。その恐怖が年間18日もやってくるといことは、雷の被害から逃れる方法を知っておかねばなりません。

雷の発生しやすい大気の状態が不安定な時は雷注意報が発令されます。雷の危険を知らせる兆候として「積乱雲が大きくなる」「黒い雲が近づき、暗くなる」「急に冷たい風が吹く」「雷光が見える、雷鳴が聞こえる」といった状況があります。これらの兆候を認めたときは屋外での活動を中止し、建物、自動車、バス、列車などの安全なところに避難しなければなりません。雷は10kmの範囲内で落雷の危険性があるそうです。そのために日本ラグビー協会では「30/30ルール」というものがあるそうです。これは、「雷の閃光と雷鳴の間が30秒以内の場合はプレーを中止し、安全な場所へ避難する。競技場への復帰は、最後の閃光または雷鳴より30分以上が必要」というルールです。30という数字は、音（雷鳴）は1秒間に340m進むといわれ、閃光から雷鳴までの時間が30秒あると $340\text{m} \times 30\text{秒} = 10200\text{m}$ 、つまり10km先での落雷という計算になり、これより間隔が短いと「10km圏内での落雷で危険」との判断基準によるものと思われます。

雨が止んだり青空が見えてきたり、5分・10分、閃光や雷鳴が途切れたりすると、『できるんじゃないか』と心の中で葛藤が起きそうですが、過去をさかのぼると、「野球の練習試合中、降雨で中断していたが、雨が上がり青空も見えてきたことで再開。直後にマウンドに落雷」という事故の報告もあり、慎重な判断が求められます。

学校でも落雷による事故が起きないように、「30/30ルール」を参考にしたいと思います。もうじき、プールを使った体育科の学習も始まります。水の中に落雷があると、大勢の児童が同時に落雷の被害に遭う危険性があります。雷注意報などの気象情報の確認や、目視と音による天候の情報収集に努め、慎重に判断したいと思います。（参考：朝日新聞「子どもとスポーツ」落雷事故編）